

具体全一の生活

抽象的な生活

抽象的な生活とは、死んだ生き方をしていることである。抽象的な生活が何故に死んでいるか。人生と我とが二つになつて、さながら水と油のようになってゐる生活だからである。我は住岡という家の戸主である。だから私と住岡家とは対立してはいない、我と家とは不二である。これをおしすすめて社会と我とが、国家と我とが、宇宙と我とが渾然として一体であるならば、逃げるに逃げる所なく去るに去る所なく、ただ活きぬく道が一つあるだけである。かかる具体全一の生活こそ望ましいことである。家がもし自分と一体でないならば、家は我を殺す火宅となるであろう。もし人生と我とが水と油であるならば、人生は怖るべき地獄であろう。所詮凡夫の正体をつかめば「逆」の一字につきる。五逆誹謗正法とは助かつていない者の相であると積尊は誠められた。

子供の教育

子供の教育などでも考えねばならぬことが多いが、わけても、あまりに厳しすぎてはならないということである。もちろん子供が本気で故意に悪いことをしたり、悪い習慣がつきそうな時、しつけをして正しく善良にするということはいよいことであるが、親の気分本意で時には無理を言つて叱つたり、親の無智から、やたらに我慢を通したり、絶対に子供の自由を奪い、個性を無視し、子供の頭め上に常に不愉快な重圧がおかれてあるようなやり方をすれば、強い子供は親に反逆して去つてゆくし、弱い心の子であると、何時のほどにか自分の生きる中心点を自分の意志におかないで親の一笑一顰の上において、魂を持たない、親のための人形になつてしまふ。表面は従順に見えても心の底には反抗心や不平が動いている。それを又表に出し得なければ得ないだけ、衷心の声と動作との相違した抽象的な生活をする人間になつてしまふ。それが習慣づけられると、遂には意志の弱い、自分の考えも主張し得ず、波風をおそれ、ただ事なかれ主義の一生を渡つてしまふ。最後にあたつて残るものは愚痴の二文字にすぎない。時には模範青年と言われる人のなかに、この種の人形がいることがある。青年団のためには模範青年でも、こうした抽象的な善人であれば、人間の中の墮落者の一人である。こうした善良なる墮落者を親の権力がつくる。

私の幼時――は体も弱くて小さかつたし、意志も弱かつたし、肝も小さかつたので、級長にされても、皆のためにあべこべに虐められてさっぱり治まらない。それでも品行は上であるし、世間からは評判のよい子であつた。親も亦それが自慢らしかつたが、今日から考えると、私の幼時は怖るべき墮落への道を歩んでいたのであつた。郡長さんに御褒美をもらったなどと喜んでゐる時、驚くべし、魂のぬけたお人形が淋しく立つて御褒美を抱いていたわけである。十歳や十五歳の少年を、なすがままに放任するのもいけないが、一人前の大人の如く取り扱う盆栽教育は人を殺す教育である。

勝敗

一つの映画物語である。

今年九歳になったエディは生れつき片足の悪い跛である。父のトムも母のマーガレットもこの不具の我が子が一人に可愛い。近所の子供が野球をしているのを羨ましそうに見つめている。外にこの家にエディを愛している老人がいる、年は七十だがまだ元気で鉄道馬車の馭者である。このジョーナス老人はトムの伯父さんであるが、エディを孫のように可愛がる。この老人も片足が不自由である。エディはジョーナス老人が大好きである。又してもマニラ戦争の話、自分が行ったから戦争に勝てたよいうな話、この伯父さんが盛んに運動をすすめる、そして二人で野球をはじめめる。どうにかして幼いエディを鍛えて強くしようとする。然るに両親は運動させることを好まない、厚着をさせる、まるで真綿で包んだようにして育てようとする。

両親はこの不憫な子供のために従兄のフレディを家に呼んで遊び相手をさせようとする。けれども年が上で悪度胸の据ったフレディは彼をいじめめる。エディは遊び事の時でも「弱虫めが」と、度々殴られ蹴られて散々な目にあわされる。両親は荒い遊びから彼を遠ざけようとする。

けれどもジョーナス老人は、「喧嘩が出来ない？ そうだ、喧嘩は決していいことではないが、世の中は全てが闘い、つまり喧嘩じゃ。そら、誘惑という奴と喧嘩しなくちゃならないだろう。悪い習慣という奴をやっつけなくちゃならないだろう、失望がやってくれば此奴に打ちかたなくちゃならない。あの餓鬼大将のフレディに対してだつてそうだ。お前が勇敢に彼奴を負かしてしまえばもうそれからはお前を虐めたりしなくなる。だからどうしても強い人間になることが必要だ。」と言った調子で、老人は子供を相手に拳闘をやる、川へ釣りにつれてゆく。

だが拳闘をやれば鼻血が出るし、川辺に遊びにゆけば水に落ちずぶぬれになった。両親は怒つて子供を老人に近づけないようにする。こんなことが度々重なったのでとうとう老人はこの家から出されてしまう。のみならず会社から首になるが、養い手がいないので半ば強制的に養老院へ入らなくてはならないようにされた。少年も名医の診察を受けたが、もうこの足は治らなないと宣告された。少年は両親に老人を悪く言つたので家を出されたのだと思ひ、なつかしさに堪えず、謝りにゆく。

二人が仲よく語っている時、悪少年フレディが来て石で窓ガラスをこわし、老人を「乞食」とののしる。この罵りを聞いた瞬間、弱気はケン飛んで、反動的に彼の胸の底から何とも言えない不思議な勇気がムラムラと送り出た。天にも地にも又とない親愛なる老人の名誉のために。彼は猛進した。ここで激しい格闘がはじまる。老人は二人を自分の部屋に入れて、ピストルをもつて入口を守る。「エディ、今日こそ、お前はやつつけるんだぞ、お前にはフレディの十倍もの勇気が出たぞ！」

室内ではテーブルや椅子の倒れる音、物がこはれる音二人が壁にぶつかる響き、うなり声、さながら二頭の猛獣が願み合っているよう。少年の両親が狂気のように走つて来る。老人は入口に鍵をかける。両親がどんなに言つても戸をあけない。「駄目だ、闘えるだけ闘わせるんだ、決して止めてはならないんだ。エディはフレディと闘つて

いるだけではない。あれは今自分の臆病な心と闘ってるんだ。彼奴は自信力を持つために闘ってるんだ。彼奴は自分の将来のために闘ってるんだ。わしは彼奴の勝利を待っている。邪魔しちゃいけない。」

夫婦は発狂しそうだ。鼻血が流れる、髪は乱れる。シャツもズボンも引き裂かれる。だが次第にエデイが勝って、遂に両親まで声接する。エデイは勝った。勝った。遂に勝った。床に倒れたフレデイはやがてジョーナスに謝る。エデイは皆にほめられる。そこへ養老院から自動車 came が来たが、此度はエデイがやらない。両親もこの老人を喜んでつれて帰る。数日の後、トムは一家皆で楽しい遠足に出かける。『楽しい日が又帰って来た！ 空には一片の雲もない、声を揃えて歓びの歌を歌おう、たのしい日がまた帰って来た！』と子供たちの声は朗かに澄み渡った大空高くひびき渡ってゆく。『キング』六月号「僕の武勇俸」の梗概

善と悪

悪はとゞむべきものであり、善はなざるべきものである。けれども善人になるということは決して弱者になるということではない。もし弱い故に、何でもかでも敗けていることを善と考えて消極的になるならば、その善は、善ではなくて卑怯であり、憶病であることが、善らしく見えただのにすぎない。

釈尊には瞋怒はなかつたという。いかりがなかつたということは、釈尊が弱くなられたのではなくして、強い力が人格を本質的に生かしておいて、どこまでも勝ちきつた強者として怒りを克服していられたのである。

言いたいことを持ち、為したいことがあるのかかわらず、恐れるが故に言い得ないのと、何等の怖れを持たないし、言わんとするならば言い得るが、自らの心の奥の声に聞いて言い得ることを言わないのとは天地の差を持っている。

人には心の底に善の力と、悪の性とそのいづれをも持っている。ヂキル（天使のような心）と、ハイド（悪魔）とが統一されているのが人間である。普通は善の芽だけをのばして、悪の芽を亡ぼすことを修養だと思っている。しかし人間は善だけにのみなりきれないし、悪だけにのみなりきれない。善だけになつたら善の意味はなく、悪だけになつても善の意味はない。善と悪とがともなっているが故に善の意味がある。善と悪との全き統一こそ、人格の人格たる所以である。

その幼時あまりにも、権力等の外面からの力を持つて圧迫して、悪の芽をのばさず、善ばかりの人にしようとする、抽象的な善人が出来、それがその重い圧迫監視の下からのがれるか、或は青春期転換の時頃になると、急に悪の芽がのびはじめ、本人自身すら自分をもて余すほど狂暴的な性格に変わったりする。けれどもそれを通して、やがて善の根も悪の根も全てがのびきつて一人前の人間になるのである。この一大転換期には、大概の人が恋愛に陥る。そして善と悪との全てをこれが契機となつて引き出され、時には思いきつた没常識な行動をとる。周囲に温い理解者と指導者がないと、可惜一生を台なしにするようなことをする。この時には極端に感傷的になつたり、非常な淋しさを感じたりする。この人生の危機には、善だの修養だのというこ

とよりは、内部生命が延びきろうとする時である。内部生命が適当にのびきると、やがて一人前の人間となって手をはなしても危くない壮年期に入る。

だが悪の芽を、善を培わずして外にのみ出させ、それが習慣づけられると、壮年期以後の第二の性格となる。世には如何なる悪をしても恥とせず、無智な厚顔しい人がいる。これをいわゆる教養がないというのである。少年期の腕白、青年期の狂暴、やがて人生全体を無軌道、無道義で終つてしまふ者は、弱き善人、抽象的な善人と共に、墮落した人である。宗教はこの二つの危険から人を救おうとする。

宗教の使命

江戸川乱歩氏は、新聞紙上でこんな意見を發表していた……探偵小説の使命は、探偵小説に出て来るような犯罪者を造るために書かれるのではない。人間の心の中の悪を、瀉泄するためであると。誰にでも、強盗や犯罪人の心に通ずる悪の毒素が心内にある。それを探偵小説を読むことによつて、瀉し、泄すためである、というのである。確に卓見だと思つた。淋しい時には淋しい映画や小説を好む、それによつて淋しさを洗おうというのである。

宗教は悪を説く、道徳や法律では問題にしないほどの深い悪を説く、それによつて我等は、心の奥底に潜んでいる悪の毒素を全て洗い出され、悪の相を意識の表面に照し出される。仏智が信の内容となつて、限りなく心の奥の奥まで照破される時、内省懺悔の人となる。

悪なくして善はないと言つた。そしてそのいづれをも引き出し、のばしきらねば人間になれないと言つた。だが人間に二種類ある。悪が外に外にと出れば出るほど、自己自身は悪を悪と知らない。悪が外に外にとのびきつたのが放蕩無頼の悪党であるならば、内へ内へと悪の根ののびきつたのが聖者である。

聖龍樹は仏教史上での古今独歩の巨星である。仏教の各宗はいづれもこの巨人から流れ出でたのである。けれどもかかる大聖も、その青年期は、人生の意義は愛欲にあるとて、友人四人と共に王宮にしのび入り、美姫女官を犯しまわり、ある夜、兵士たちのために友人三人が斬殺されたのを見て、愕然としておどろき入つた。その精神的なショックが彼を仏道に走らしめ、煩悶求道、大乘仏教の真理に悟入し、仏陀の大慈悲に救われて、大聖大学者となつたのである。

噫。仏と魔とは紙一重の隔りである。もし一步をあやまらんか、この大聖は大悪魔で終つたかも知れない。

悪魔と弱者、悪魔は時に、一滴の紅涙に、一片の赤誠に、ひつくりかえつて人間になることがある。悪は悪でも血あり涙があつて、血を知り涙を知る。けれども、打てどたたけど、冷えきり凍えきり、自己を誤魔化すことに慣れきつた弱き善人？はこの血や涙にすら鈍感である。ここに人格的な大革命をおこさせるためには、温かき人格と、その心の底から救いあげる光と力とがいる。宗教の持つ使命である。

信念

信念は全てを解決する力である。人格の底に横たわる腹である。悪魔にも信念はないし、抽象的人間にも信念はない。信念はただ血の中に湧き出でる力である。

人格は永遠に主の王座に坐らなくてはならない。全てに勝つ人間の王座に。血は本能的である。哲学は論理であり、概念である。哲学だけでは信念ではない。本能だけでは信念ではない。正しい道理が血にとけこんで、哲理が本能的な相となつた時、信念となる。

高い高い大乘仏教の哲理が、低い低い大地の底の人間の心、その血にとかされた時、そこに大乘菩薩道が生れる。「信心」とはこの仏凡一体融合の妙境を言うのである。

もし民族が抽象的な善人になれば、如何なる力にも勝ち得ない亡国の民となる。民族がもし何等の理想を持たない悪魔的になれば、世界を指導することは出来ない。澆刺たる元氣、不倒の力というのは、本能的な力である民族の内奥からこみ上げる血のたぎりである。この力を弱めてはならない。しかもその中に不断に高い精神文化、思想信念が培われねばならない。満州事変を通して大和民族は、世界の重歴をはねのけて、自主独往の天地を進展して来た。信念の力である。

私は日本の現状を見つめて、青年につげる。

「人生を最後に解決するものは信心である。」と。

現代日本青年階級の悪い動向は、あまりに刹那的だ。断片的だ。板張く自己を教養し培おうとしないことだ。ただ会社の首をきられることを恐れて、時計と重役の顔色のみを見て生きるような抽象的な生活から自己を救おうではないか。人生には別に、5もつと根強く、朗らかで、歓びに満ちた世界が存在することを告げておわる。